

品川区いじめ対策委員会（第3回）

議事録要旨

1 日時

平成30年3月13日（火）午前9時30分から午前11時30分まで

2 会場

品川区役所第二庁舎251・252会議室

3 審議

- (1) 平成29年度「品川区いじめ防止対策の取組」の成果と課題
(目安箱、アイシグナル、専用電話、ハーツ)
- (2) 意見交換会

4 出席者

斎藤尚也委員長、岡本淳子委員、新藤こずえ委員

5 発言要旨

(1) 平成29年度「品川区いじめ防止対策の取組」の成果と課題

- いじめの総認知件数は昨年度と比べて増加している。これは、からかい等、些細なことでもいじめとして認知することを各学校に呼び掛け、報告を徹底した結果だと考える。また、学校の先生方のいじめに関する認知力、発見力の向上によるものと考えられる。
- いじめの学年別の内訳は、5年生から8年生で8割以上を占めている。これは、子どもたちが思春期にさしかかり、人間関係特有の難しさが出てくる発達段階であるからだと考えられる。
また、いじめの内容別の内訳は、平成29年度は悪口および嫌がらせが最も多く、これは数年変わっていない。また、全国でも同様の傾向がある。
- いじめの認知件数の増加を、学校のいじめの発見力が向上したと前向きに捉えることは良い。
- 今まで6年生から7年生に切り替わるときにいじめが増える傾向にあったが、今回の内訳で見られない。そのかわりに、全国的に5年生においていじめが増加しており、子どもが思春期になり活発に活動し始めることの現れが出ていると考える。
- 小学校や義務教育学校の前期課程のいじめは、上の学年の子どもがやっていることを真似する怖さがあるが、全国平均に比べて小学校1～4年生のいじめ件数が少ないようである。学校の先生がよく管理していることが伺える。

【目安箱、アイシグナル、専用電話について】

- 学校では年度当初に、朝礼等で目安箱やアイシグナルの趣旨等を子どもや保護者に説明しているが、投函数が減少していることが伺える。減少している理由としては、子どもが学校の先生や保護者といった、身近な大人に相談するようになってきたことや、学校の相談体制が充実してきたこと等が考えられる。学校では、校長やスクールカウンセラーが独自に相談ボックスを作成したり、学校で子どもの様子を見取り、声掛け等を行ったりすることで、何か悩みがあったら、すぐ相談できる、先生に言ったらすぐ対応してくれるというような学校の相談体制の充実が図られてきていることが推察できる。
- 目安箱やアイシグナルは、平成25年度から、いじめを受けた場合、学校や保護者に相談できない場合のツールとして導入し、教育委員会と子どもたちが直結しているツールである。

相談数が減少し、「友人関係の悩み」や「教員や学校への苦情・要望」といった相談内容がほとんどを占め、機能の変化が伺えることから、今後のあり方について検討していく必要があると捉えている。
- 専用電話については、平成29年度の相談件数が減少しているが、これはハーツが専用電話を受けた後、面談を行う等、より継続的な対応を行ったことが理由の一つであると考えられる。専用電話は保護者からのニーズが圧倒的に多く、いじめにつながっている割合も高いことから、今まで以上に機能を周知していく必要がある。
- 学校の先生や保護者に相談できる子どもが増えているため、目安箱の役割は減っているかもしれない。しかし、家庭環境が不安定であるなど先生や保護者に相談できない子どももいる。目安箱は残したまま、スクールカウンセラーが対応する等、管理方法を変えてもよいのではないか。
- 専用電話については、電話をかけることで安心感や納得感を得ることが重要である。学校と保護者の間をつなぐ役割をハーツが担っている。
- いじめは突発的に出てくる怖さがあるため、間口は広げた方がよい。

【ハーツについて】

- 重複した課題のある子どもへの対応について、ハーツが複合的な視点で見て、チームで携わることができることはとても良い。
- ケース会議を行うことが重要になってくる。ケース会議によって支援が進展することも多いため、さらに積極的に実施していくとよい。
- 家庭環境の問題が背景にありそうな子どもについては、訪問活動を行うことも大切である。ハーツの訪問回数は高く評価されるべきだと考える。
- 様々な会議への参加はとても良い。会議へ参加することによって全体的な視野の中で問題を捉えることができる。また、ハーツが組織の中に定着してきていることの現れにも見える。